

## 往復書簡

今回からは、安達氏（山形県 ㈱安達農園）と当機構理事長の高木勇樹との往復書簡が始まります。

拝啓 高木 勇樹 様

寒暖の差が激しい日が続きますがお体には変わりはありませんか？

私は今、山形を離れて群馬で野菜作りの研修を行っています。なぜかと言いますと、小さい頃から「お前は果樹園の三代目なんだぞ、将来はこの果樹園を背負っていく存在になるんだぞ。」と言われて続けてきました。正直そのプレッシャーに負けそうになったことも何度かありましたが、山形を離れて外から安達農園を見てみたい、果樹と野菜の違いを見てみたいと群馬県の「あずま産直ねつ」との門を叩きました。

事実、高校と大学は農業関係に通い就職し一八年がすぎました。現状は「果樹、野菜と関係なく自分は農業が面白くてしょうがない」が一番の感想です。あずま産直ねつにお世話になって半年ですが、生産している野菜の成長や変化が見えてくる部分と、果樹とは違い収穫までの日数が短くないなかでどう管理していくのか、毎日がわくわくしています。「野菜を作るのも悪くない」そんな考えも出てきています。

しかしながら、面白いだけでは農業はできないのも実情です。果樹とは違い長いスパンで管理していく作目ではないこと、今までに経験したことのない異常気象による作物の成長変化と課題はあります。

外から安達農園をみて雇用されている年齢がぐっと若いことに驚きました。いろんな県から集まっているあずま産直ねつですが、これだけ若い

人たちが農業に従事していて、数年で生産の主導ができるまで育てられる松村さんはすごい。人材育成が課題ではありましたが、ここまで違うものかとギョップを感じ改心しました。生産を主導している人からすれば自分の山形でのプレッシャーは大したことではないと実感しました。当然の事ではありませんが、安全で安心な農業をそして消費される方が笑顔になる農作物を努力をおしまずに作りたいと思います。

平成二十五年十一月吉日

敬具

安達 勝夫 （あだち かつお）

一九七〇年 山形県東根市生まれ  
一九九四年 日本大学農獣医学部農学科卒  
一九九四年 ㈱安達農園 就職・就農



拝復 安達 勝夫様

先月十一日東京では木枯らし一番が吹きました。いよいよ師走、何かと気忙しい日が続きますね。お互い体調管理には万全を期しましょう。

どんな世界でもあとをとる、あとを継ぐというのは大変なことです。貴兄のように高名な安達農園の御曹子ということになれば尚更のことと思います。

でも考えてみて下さい。子供は親を選べません。親との絆はこの世に出てはじめてのもの、これを活かさない手はないと思います。

親を頼りに出来ずひとり切りひらいて行かなければならないのが当たり前の世の中で、考えようによっては、初めから立派な経営をしている農園で働けるなんて、極めてラッキー、こんなに恵まれたスタートを切れるのは天運の賜もの。しかも貴兄は農業が好きでしようがない、農的人間なのでから。

でもそれは他人の見方。貴兄にとってはプレッシャー以外の何ものでもない。そこで果樹以外の分野で一流の他人の飯を食ってみようと思われたのは素晴らしい。一流のところ、働くことは、自分を見つめ直す、ものさしを豊かにし感性を磨くのに絶対必要なことだからです。

貴兄は六カ月で既に野菜農業の本質を見抜いただけでなく、人材育成の大切さとそれを実践している松村さんの一流のすごさを感じとり、そして自分を「改心」する柔軟さを持っておられる。

私は貴兄もすごい豊かな感性の持主と確信しました。

努力は必ず報われますが、それをより確実にするのは感性（想像力、創造力、直観力、先見性、判断・決断力、責任感などの総合力）の力というのが私のこれまでの人生から得た、信念に近い一生かかされている命の使い方」のものさしです。

貴兄からの次のお手紙が待ち遠しく、楽しみです。向寒の朝、ご自愛専一でお願いいたします。

敬具

平成二十五年十二月吉日

高木 勇樹（たかぎ ゆうき）

一九四三年 群馬県生まれ  
一九六六年 東京大学法学部卒業後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官など歴任。  
一九九八年 農林水産事務次官、二〇〇一年退官  
二〇〇二年 農林中金総合研究所理事  
二〇〇三年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任  
二〇〇七年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長  
現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力。

